

新しい年を迎えて

明けましておめでとうございます。

昨年は、東日本大震災や福島第一原発事故などに見舞われ、被災地では、今なお厳しい状況が続いています。こうした中、年賀状では「おめでとう」という言葉を避けた方も多かったのではないかと思います。私は、意識して「おめでとう」ということにしています。

昨年の暮に、慶応大学の竹田恒泰先生から「皆さんお正月はめでたいというが、本当のところは、正月だからといって特にめでたいものではありません。大してめでたくはないのに、皆でめでたいといい合うことが正月の意義です」というお話をお聞きして、そういうことならば、皆さんと大いに「おめでとう」といい合って、新しい年を少しでも元気にして行きたいと思っているところです。

私は、毎年、1月1日には、各新聞紙を取り寄せてその社説を見比べることにしています。

各紙の社説のテーマを簡単に紹介しますと、

道新は「未来に責任を持つ社会に」

読売は「危機を乗り越える統治能力を（ポピュリズムと決別せよ）」

毎日「問題解決できる政治を」

朝日は「ポスト成長の年明け（すべて将来世代のために）」

日経は「資本主義を進化させるために」

というものでした。

道新、読売、毎日の社説は、昨年から引き続く激動の年を迎え、政治がしっかりとしたリーダーシップを取るよう求めています。朝日や日経は、経済問題を中心に据えています。つまり、つまるどころ政治のガバナンスを問うているという点では、他の3紙と共通しているように思います。

東日本大震災や福島第一原発事故に対する対応、年金や医療制度といったセーフティネットに対する国民の不安、破綻の危機にある国や地方の財政、更にはTPPの導入といった様々な課題に対して、政治が機能不全に陥っているよ

うに見えて仕方ありません。

我が国は民主主義の成熟した社会であると思っておりますが、同時に、その民主主義によって、早急に決定し行動しなければならない課題に対しても、迅速かつ有効な対策を講じることが出来ずにいるようにしか見えません。まさに、ポピュリズムの弊害と揶揄される所以です。

こうした中で、大阪市の橋下市長のように、明確なメッセージと説得力、敵対する勢力をなぎ倒してでも実行するという強力なリーダーシップは、微温的な民主主義に対するアンチテーゼといえましょう。そして国民の中には、そういう強力なリーダーの出現を期待する空気が強くなってきているように感じます。

私は、そうした空気を必ずしも歓迎しません。確かに、民主主義という仕組みは様々な欠点を抱えている事を否定しませんが、国民の意思を国政に反映させていく上で、欠くことのできないものです。民主主義を維持していくためには、手間や暇だけではなくコストもかかりますが、だからといって、強権的な手法がベストとは思えません。

政治が、民主主義の欠点を補いながら国民の期待に応えていくためには、明確なビジョンを示し、手間隙を厭わず国民を説得して引っ張って行く、そういう意味での強力なリーダーの出現が待たれます。

リーダー不在のままでは、日本丸といえども、グローバル化している世界の海で漂流してしまいます。(塾頭 吉田 洋一)